

## 官民一体の日本語教育支援にかかわるボランティアの経験と気づき

館 奈保子 (武庫川女子大学)

今井 貴代子 (大阪大学大学院 招聘研究員)

田中 薫 (とよなか JSL)

### 研究の目的

官民一体の日本語システムづくりにかかわるボランティアに焦点を当て、日本語教育支援に携わるなかでどのような経験や気づきをしているか、その変容を明らかにする。

### 研究の価値・意義

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」によると、5人未満の少数在籍校が約8割を占めている。多くの自治体にとって、少数点在地域における日本語指導のシステムづくりが課題となっている。また、近年、地域資源としてのボランティアが学校教育に参画することの重要性はますます認識されている。本研究は、子どもの日本語という課題に対してボランティアがかかわる上での課題や可能性を検討する。

### 研究方法

豊中市教育委員会、とよなか国際交流協会との協働事業にとりくむ日本語指導者グループのボランティア10名に、2016年9月から10月にかけて1人あたり約1時間、半構造化インタビューを実施し、その結果を分析した。

### 結果と考察

ボランティアの多くは人生の区切りの時期に活動にかかわり始めた。参加動機は、「日本語」「子ども」「子どもの日本語」の3つの関心に分けられた。実際に日本語指導を始めると、「子どもの日本語」という分野が「子ども」とも「日本語」とも違う全く新しい分野であることにボランティアは気づき、そこで求められるスキルや意識、かかわりを習得するまでかなりの時間と労力を費やしていた。ボランティアは①「準備模索期」②「指導模索期」③「理解模索期」を経験し、③では子どもの理解度や状況を読み取ろうとするなかで、責任感とやりがい、そして不安を感じるようになる。「子どもの日本語」の課題を実感し、ボランティアのできることの限定さにも気づき、官民の連携が、子どもの日本語習得を伸ばすうえで重要だということを改めて認識するようになる。